

# 廣告

主筆 田中智學居士

## 妙宗

四月六日「第五編」第七號「既刊

送金は師子王文庫宛鎌倉局振込の事

毎月一回(六日)  
每號大附録附發行  
所相模鎌倉要山師  
子王文庫  
定價一部金十錢  
(附録共)郵税金一  
錢壹ヶ年前金壹圓  
貳拾錢(不要郵税)

主筆 加藤 文雅

## 日宗新報

毎月三回 八の日一  
發行、發行所武藏  
池上日宗新報社  
定價一部金五錢  
十八冊 (半年分)  
八十五錢、卅六冊  
(青年分)壹圓六十  
五錢、一切前金の事、送金は池上郵便受取所  
へ振込み「日宗新報主任加藤文雅」と御指定の  
事、七月八日「創立第八百十八輯」革新第二百  
三十九輯「既刊

# 稟告

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす  
一本誌は一冊五錢十二冊前金五十七錢廿四冊前  
金一圓八錢郵券代用は一割増但五厘切手に限  
一講讀申込の節は住所姓名を附書にて認むべし  
一爲替は武藏國品川郵便局へ向け御振り込の事  
一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要す  
る向は返信料を封入するか或は爲替振込の節  
拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし  
一廣告料は五號活字廿四字詰每一行金七錢なり

明治卅五年七月十五日印刷發行

發行所  
編輯人 井村 尚也  
印刷人 山根 顯道  
鈴木 障學

發行所 統一團團報部  
東京府荏原郡品川町元南品川四百十二番地

### 目次

- 一 即身成佛……………本勝院 稿
- ▲ 混雜の即成と純粹の即成 ▲ 混雜純粹の姿
- ▲ 混雜と純粹二面不二 ▲ 成佛の相續
- 一 女性に對する聖眞日蓮の温情…富田院 稿
- ▲ 出產に對する同情 ▲ 月水に就くの教示
- ▲ 男女相思の情愴 ▲ 乙御前と千日尼
- ▲ 孝養の獎勵 ▲ 親子の恩愛
- 一 親經の說時論……………高田 日編
- ▲ 親經の說時に法華已前なる明證▼
- ▲ 法華の說時に親經の已後なる明證▼

### 統一彙報

- 一 至師隨行日誌(續)……………高木松太郎
- 一 第二回本化門下夏期講習會彙報……………奇峰 生
- 一 本化宗友會第十回の會合……………
- 一 本化中央青年會の成立……………
- 一 法雨光治東播磨石の浦……………
- 一 宗徒大會決議實行期成同盟會……………
- 一 第二回本化夏期講習會の終了……………

### 廣告數件

第八十八號

明治三十五年八月十五日發行

# 統一團報

# 最輕便にして最完全なる大出版

校正精確 代價至廉

高祖は日本の精神にして世界の光明なり、御遺文は末法の法華經にして最も明確に佛意を人間の言辭に翻譯したる世界最上の名文也、信するもの誘するもの總てはるべき人界無上の大福音也、されば教徒は勿論、一般世間の人の必ず讀まざるべからざる寶典也、是を以て今回最大普及を計りて左の輕便的出版を創始す、現行遺文録の校正漏れは、小林日童、本間海解の兩碩學が多年苦心重訂せられたる稿本に基きて校止し、御眞筆の存する諸篇は、一々拜照校訂し、未刊の逸篇は採擇して『續集』となし更に各數圓の碩學一百餘名の校正を請ひたる未曾有の出版なり

# 高祖遺文録

洋製袖珍 一册凡三千頁  
「並製」 金壹圓以内  
「上製」 金壹圓五拾錢以内

(外に雁皮紙和裝の紀念本を製す○實價未定)

(對照目錄類聚索引略年譜聖蹟及闡淨統一地圖註疏案内等を合編す) 此保證金  
本年十二月中出版「豫約申込」は十月十三日迄申込と同時に金五十錢を添へし、發行へ預り後れては定價に復しせず●校正日誌は日宗新報へ掲ぐ宗學上重要な記録とせらるる  
豫約申込所 東京府荏原郡池上村林昌寺内 祖書普及期成會

## 御遺文縮刷之要旨

宗學ノ振ハサルハ御遺文ヲ精選セサルニ依ル、御遺文ノ精選ニテハ其ノ原因ヲラスンハアラズ、利モ行住坐臥御遺文ニ來侍リ及在御遺文ヲ持テスルニ任ズ、任ズニテ聖祖ノ大精神ヲ神傳シテ必ズ、夫レ斯ノ如クナラバ宗學ノ振起シテ能ク之ヲ繁カシ、今日ノ事專ラ御遺文ノ大普及ヲ謀リ、自他共ニ御遺文ヲ拜シテ、直ニ、聖祖ノ威靈ト大精神トニ感應セシムルノ外アルコトヲ、彼力日ヲ圖ラズ、同人ト共ニ遺文ヲ校訂シ、先德ノ校本ニ考ヘ、魯魚ヲ正シ、且ニ精華ノ索引、附シ、因縁以テ一覽ニ認メシ終ランコトヲ、嗚呼明治三十五年ハ國家史記第六百五十年ナリ、聖祖ニ於テ是レハ、聖祖ノ遺文ヲ、遺文ニテ成數セバ、聖祖ノ遺文ニ一覽ニ認メシ終ランコトヲ、嗚呼明治三十五年ハ國家史記第六百五十年ナリ、聖祖ニ於テ是レハ、聖祖ノ遺文ヲ、遺文ニテ成數セバ、

## 統一圓報第八拾八號 (明治三十五年八月十五日發行)

### ●即身成佛

本 勝 院 稿

日蓮聖人の御弘めなされた即身成佛と言ふ法華經の御利益は、最早六百有餘年日本全國に弘つて隠れなき宗旨故、知らぬ者は誰れも無かるふと思はれるが、能々考へるとまだ知らぬ人が澤山ありませす、有る古歌の  
皆人は知り顔にして知らぬなり  
の下の句を一寸と取替て御一笑に備へませす

直になられる佛ありとは  
斯ふ申すも偶然の御話ではありませせん、先ころ有る處にて法華の大信者と堅念佛の者と議論を仕て居るのを聞きよしたが、記念佛者の云ふに、即身成佛と云ふ事は菩薩達が法華經の修行を成される上の事です、凡夫の吾等が上には其様な事は出来る事でない、其證據に日蓮聖人が法華を弘めてから六百餘年になれ共、一人も即身成佛した人が無いと申すすと、法華信者は是に答へて、汝は法華經を見ないから左様の事を云ふ、提婆品を見よ八歳の龍女が即身成佛して居るではないか、念佛には即身成佛が無い、法華經は即身成佛の大法であると申された、すると又念佛信者が申すには、夫は昔の事じや今時即身成佛する者は無い、今は末法と云ふて惡世である、左言ふ汝が即身成佛しないではないか、若し即身成佛して居ると言は、何故腹を立て

たり強欲を起したり人を憎んだりするぞと申すと、此時又法華信者が言ひますには、自分達は未だ信心が薄いから即身成佛は出来なけれども、追々是から信心を深くすれば終に即身成佛が出来すと申された、念佛信者は是を聞いて今出来ないものが何時まで待ても出来はせぬと申された、其時學生らしき青年の一人が傍から口をだして、即身成佛と云ふは何も繪に書たり木で造つて有る佛の様に成るのでは無い、左言ふ事を思て居るから議論が盡ない、抑も一切衆生は皆佛性と申て佛の性質を具へて居る物であるが、夫を知らぬが凡夫である此を知るを佛と云ふ、然るに是を知る者は無い、其故は法華經より外の經文には阿彌陀經で有るが何經で有るが一切此事は説て無い、依て念佛なんを信じて居ては到底解らない、法華經の信心に入れば即身成佛を知る事が出来る、他宗の者は我身の實を知らぬのである「不知は無に同す」とは此事であると思つた、此に於て法華信者は得意の色を顯し、念佛信者は不得心の様なる顔をして居ました、又他の傍聴連は佛敎の事は中々六ッ箇數で解りませんと申して皆々立退りましたと申ことであります、花の都の東京ですら斯る事が有るのですから何に況やです、即身成佛の御利益を信せざる人がまだ一澤山あると勸へましたから今少し計り其利益を申述べす否御覽に入ります、併し此を御眼にかけるには認めらるゝ方法を御話せねばならぬ、心こゝにあらざれば見れ共見へず、聞け共きこへず、喰へ共其味を知らずと云ふが如くです、先成佛に混雜と純粹との二種ある事から述べますが、今混雜と名けたるは佛と凡夫との混雜です、是に付身口意三業に於て混雜の姿を示す事にします、第一意業に於て申せば凡夫の意は見思、塵沙、無明の三惑ですが而して佛の意は妙法蓮華經の題目です、何故題目が佛意であるかと申せば、法華の題目は佛の隨自意究竟の梵音聲にして、釋迦佛五百塵點地心乘舞心中に覺りたる諸證の覺悟心の音聲に發表された物なる故、題目の梵音聲は佛意と同一軌です、故に玄義十三云、受諸説時只是説三於教意、教意期是佛意即是佛智、佛智至深是故三正四請、如此觀難比三餘經、餘經則易云、宗祖此釋を受けて曰、此釋を意分明なり、教意と佛意と佛智とは何れも同じ事なり、題目の五字を以て一代説教本迹二門の神とせり、經云、妙法蓮華經如來壽量品是也云云、宗祖又云、此釋の中に佛意と申二字は色法を抑へて心法と云釋也、法華經を心法と定む云云、又云佛の入滅は既に二千餘年を経たり、然と雖も法華經を信する者の許に佛の音聲を留て時刻刻念々に我れ死せざる由を聞か令る也云云、譬へば米と稻との如く米は白くして且菓也、稻は青くして且草也、然と雖も其體同一なるが如し、又有る人の言葉に口は災の門なれ共、我思ふ意を思ふ人に傳へ通はせんには、此災の門に依らざるを得ずと申したる如く、眞言實語は必ず其本心が其體形に顯れたる物です、小町の歌にも（無き人のわすれかたみの玉すさの文字を見るこそ意なりけれ）と詠せしも此義であります、然れば妙法蓮華經の梵音聲は則佛意なる事を得心すべし、然る上は三惑を斷せざる吾等が意に妙法の五字を一念たり共受持せるは、凡夫心と佛心と混合せしもの也、妙法受持者に佛心なしと云ふ可らず、今相對して示せば見思（八）思惑（八）無明（三）及塵沙の意志と妙法受持の信意とは正反對也、一は煩惱一は菩提なり、何となれば妙法信待の念慮は三惑迷煩の念慮と其趣異なるが故也、譬へば四十方里の廣野に伊蘭と申吳樹充滿せるに、旃檀と申香木其中に生じたるが如し、此は是れ香臭混合林なり、吾等八萬四千の煩惱は伊蘭充滿の如し、一念妙法の信慮生せしは旃檀の一葉伊蘭林に生じたるが如し、是を意業に就ての混雜成佛の姿なり

とす、次に口業に就て申せば吾等が悪口、兩舌、綺語、妄語の充滿せるは伊闍繁茂の如し、妙法口唱は旃檀の如し、又次に身業に就て申せば吾等が殺生、偷盜、邪淫等の惡業充滿せるは伊闍の穢なるが如し、妙法蓮華經の大本尊を恭敬供養するは旃檀の伊闍中に生じたるが如し、是れたしかに佛の振舞なり、何となれば涅槃經に云く、諸佛所師、所謂法也、是故如來恭敬供養云云、此經文明白なり法を恭敬供養するは則如來のふるまいなるべし

二に純粹とは、心は煩惱なく單純の淨心にして水晶の如し、故に十界三千の諸法皆淨ふ而已ならず、過去無量劫未來無量劫の萬事萬象悉く映り現する事明鏡に萬物のうつるが如し、又身は諸の惡業なく單純の淨業なれば束縛を脱れ、水中火中空中土中天上等自在に遊行する事を得、十界及諸種の身を顯現せん事自在なり、此れ全體究竟して佛徳を成するが故也

當に知べし、混雜と純粹の二種の成佛は二にして而も一なり、但成佛の前後なるのみ、譬ば三月より十四日月までは混雜成佛の如し、十五夜の満月は純粹の成佛の如し、暫く相違ありと雖も俱に月ならざるはなし宗祖聖人混合の即身成佛を論して曰く、譬へば女人の懐み始めたるには吾身には覺へねども、月漸く重なり日も屢すぎれば、初にはマサカと疑ひ後には一定と思ふ、心有る女人は男子女子も知るなり、法華經の法門も亦是の如し、南無妙法蓮華經と心みぬれば心を宿として釋迦佛懷され給ふ、始は知らね共漸く月重なれば心の佛夢に見へ悦しき心漸く出まし候べし云云、又云く華は鶉と成り山の芋は鰻となる、世間以て此の如し何況法華經の御力をや云云、此の御妙判を以て成佛二種の相觀と了解せよ、若し龜が半分乃至六分七分碎勢となる共、全分勢と成り畢りされば空若く事觀はざるが如し、凡夫の混雜成佛も亦是の如し、佛徳の纏切れず惡業の網離れざれば、心中十界三千の諸法映せず身軀自在に遊行する事能はず、然れ共最早幾分か佛徳を得たる事故不信者の凡凡夫とは違ふなり、半體勢となれる龜は人みな珍重すれ共、但の蕪な何の功能もなく人も亦此を稱美せず、釋迦佛法華經に凡夫の信者を佛同様に稱美し玉ふ、其經文云、是經典を受持せん者を見ては當に起て遠く迎ふべし、當に佛を敬ふ如くすべしと示し給へり、此等の法門を能々心得て而して日蓮聖人開宗已來即身成佛の人有るか無きかを判定せば、既に即身成佛の人を現見する事幾千萬人なるべし、更に即身成佛を疑ふ餘地なし、念のため更に佛語を示して凡夫の即身成佛を一層深く信せしめん

無量義經云、善男子汝是經は何の所より來り、去て何の所にか至り、住つて何の所にか住ると問は、當に善く諦に聽くへし、善男子是經は是の如く來り、是の如く去り、是の如く住し玉へり、是故に此經は能く是の所行之處に住す、善男子是經は本の諸佛の室宅の中より來り、去て一切衆生の發菩提心に至り、諸の菩薩如きの無量の功徳不思議の力を有て、衆をして疾無上菩提を成せしむ(已上經文)、此文の中に菩薩所行とは妙法の題目を行すると云ふ也、其證は法華經云、若し是法華經を見聞し讀誦し書持し供養することを得ること能はずんば、當に知るへし是人は未だ善く菩薩の道を行せざる也、若し是經典を聞くことを得ること有らん者は、乃ち能善菩薩の道を行する也云云、又此文の中に諸佛の室宅とは大慈大悲の佛の心なり、其證は法華經云、如來の室宅は大慈悲心是なり云云、然れば法華經の肝心たる妙法蓮華經の梵音聲は諸佛如來の大慈悲心より來り、去て法華經を信じて成佛を希望者に至り、法華經修行之處に住す、是故に此經は能く如是

の無量の功徳不思議の力有て、衆生をして疾に無上菩提を成せしむとの金言有て、實に有難き事です、南無妙法蓮華經と一念も信する人は即一念時間の即身成佛現見します、乃至二念三念壹年貳年十年一生相續して信受し口唱せば、彌々純粹の成佛に近付事疑なし、佛法華經に此義を示して云く、其れ衆生有て佛道を求め、是法華經を若しは見若しは聞き、聞き已て信解し受持せば當に知るべし、阿耨多羅三藐三菩提に近くことを得たり、譬ば人有て渴乏して水を須んどして、彼の高原に於て穿鑿して之を求るに、猶乾ける土を見ては水向遠しと知る、功を施すこと已ずして轉た溼へる土を見、遂に漸く泥に至りぬれば其心決定して水必す近しと知るが如し云云、實に法華經の題目を信行する人は、信じ始めたる其日より一分の即身成佛を顯し、一日二年と相續して信行走れば純粹の成佛に近付こと、無の轉と變じかゝりし無の如く、日月月に蕪の分量は減じて轉の分量の増すが如く、凡夫の心身日日に減して佛の身心日日に増るべし、觀普賢經云、彌勒菩薩佛に白して言く、世尊如來の滅後に云何して復當に煩惱を斷せず五欲を離れずして諸根を淨め諸罪を滅除することを得、父母所生の清淨の常の眼、五欲を斷せずして而も能、諸の障外の事を見ることを得るや

佛阿難に告玉はく、諦に聽け諦に聽け善く之を思念せよ、乃至當に是觀を學すべし、此觀の功徳は諸の障礙を除て上妙の色を見る、三昧に入され共俱顯持するが故に心を専らにして修習し、心心相次で大乘を離れざること一日より三七日に至れば普賢を見ることを得、重障有る者は七七日の後然して後見ることを得、復重きこと有る者は一生に見ることを得、復重きこと有る者は二生に見ることを得、復重きこと有る者は三生に見ることを得、是の如く種々に對觀不同なり、是觀に對觀す云云

當に知るべし普賢の觀とは、則法華の一念三千觀なり  
 宗祖曰、不識一念三千者、佛起大悲悲妙法五字袋内、裏此珠一令懸末代幼稚頭云云  
 早きは三七日に遲きは三生、此より延行ことなし、たのもしき哉妙法信仰の人人必ず々怠るべからず、即身成佛眼前の御利益なるへし、穴賢 (完)

●女性に對する聖祖日蓮の温情

寄 迅 院 日 靖 稿

我宗祖日蓮聖人に對する研究は、近來種々なる人に依て試みられ、其結果として聖人の或方面だけは世人に紹介されて居るけれども、未だ聖人の總ての方面に向つて研究が盡されて居らぬのは、實に遺憾の極と謂はねばならぬ、尤も世の學者論客の評論が全く日蓮聖人の眞面目を紹介することの出来なひのは、聖人主張の根本義たる教養そのものに就ての研究が不充分である爲であつて、萬不得止る次第であると言ねばならぬ、夫故に聖人に對する批評が唯英雄であるの豪傑であるの、鎌倉時代の偉人であるの日本的人物の好標本であるのと云ふに止まつて居つて、其他に別に聖人の眞價が見出されて居なひので、謂はゞ日蓮聖人の或一面に過ぎなひのであります、されば是非とも其眞價をば聖人の門下に属する我等によつて之を紹介せねばならぬのである、

世人に知られて居る日蓮聖人は、彼の山月に嘯ける虎の如くにたけく、狂へる獅子の如くに鋭き人であつたと謂ふことのみで、未だ春の水の如くに温かくして清く、秋の月の如くに美しく限なき聖人の性格が知られて居ないのである、ですから日蓮聖人と云へば、誰しも恐しき人であつたと言ふ想像が起るのであります、尤も是は聖人一世の歴史そのものが、悲風慘憺たる事蹟ばかりを以て埋められてあるからであつて、龍の口の頸の座伊東の譲居佐渡の流刑小松原の迫害、其他到る所の幾多の法難が聖人をして益々剛毅ならしめたので、即ち大難は風の前の塵なるべしと聖人の叫ばれたるを以ても知べきである、斯様に聖人の生涯は殺伐の風を以て充されて居るゆへに、日蓮聖人に對する一般の感想が、虎に比し獅子に譬るに至るのは最も千萬であると言はねばならぬ、けれども他の一面に於て聖人が優にやさしき春の花の如く柔の葉に遊ぶ胡蝶のうれにも似たる、柔順なる性情を有せられたことを想像せねばならぬのであつて、一たび怒れば鬼神も之を避け一たび笑へば幻兒も之に懐くと云ふ、即ち強柔二方面を有せらるゝ人であつたので、當時の教海が風浪險惡であつた爲に、妙法の大船師たる聖人が一乗の船を進むるに就て幾多の法難と戦はれたから、遂に聖人の歴史が強の方面ばかりを紹介して居る次第であるが、聖人は決して左様に一方に偏した人でなかつたのであつて、最も圓滿なるお方であつたと云ふ事を承認せねばならぬ

今や開宗六百五十年の紀念に際して、聖人の主義を奉戴せる我等は勿論、他宗異教の人々でも聖人の慈悲に感泣し、聖人の遺徳を敬仰し、聖人の主義を信擧するの念を一層高めたに就ても、誠に聖人は偉大なる人傑に至ります、實に日蓮聖人は決して彼の虎の如く獅子の如く、惡魔の如く鬼神の如き人ではなく、佛の如く菩薩の如く神の如く天女の如き、最も柔かに最も優しきお方であつたに相違がなほ、聖人が悲風慘雨の間を往来せられたから、非常に剛毅の様に思はれるけれど、それは見方が違ふからであつて、此優しき愛しみの深くして厚き處の性情の、其熱度の昂進した處が剛ち聖人の生涯であるので、其を恐しき虎や獅子の様に思ふのは、全たく考へ違ひと云はねばならぬのである、而して前にも申した通り女性に贈られた御文章は幾んど百を以て數ふべきほどある、それを一々引て來たら數百頁を染ねば兎ても盡すことが出来ないのである、上に擧げた處の御妙判は唯一通り思ひつきに任せて抄録しされた迄のもので、議論の系統が一貫せぬのは是非がありませぬけれど、要するに女性に對して、聖人が斯まで周到なる注意を以て、斯までに親切なる態度をお探りなされたかと言ふことを諒得し、併せて聖人は強剛なる方面を有せらるゝと同時に、又柔順なる性情を有せられた人であつて、聖人の一生の悲惨なる歴史は大慈大悲と言へる熱情の反動であると云ふことに留意してもらへば夫でよひのである、以上は聖人が女性に對する御消息の一部で、此他に幾多の種類があるが知れませぬ、併ながら其御文章の言々句々が悉く涙と同情を以て充されて居つて、一として教義の垂訓を離れて居らぬのみならず、益々信仰を勸奨してあるに至つては、實に其御遺文を拜する我等まで感涙し奉るの外はなほのではありません、之を以ても日蓮聖人は世の人の想像するが如く、畏るべく避へべき方ではなくして、最も親むべく敬ふべき人であつた

に相違なひ、然るを僅かに聖人の傳記を一閱して、英雄である豪傑であると敬稱するのみで、聖人の大なる慈悲を看破する能はぬのは、全く研究の不充分と其引通の教義に暗ひ爲であつて、我等は首肯することが出来なひのである、さるが故に女性に對する聖日蓮の温情と題しまして少しく筆を進めたのである、けれども是迄未だ萬分の一にも足らなひので、到底僅かなる紙筆を以ては語り盡せるものでない、ですから今後再び新なる命題を求めて、種々なる方面より聖人を討がひ紹介すべきことを約しておきます、今は唯聖人の御書を振奉して来たまででありまして、聖人の「書は文を盡さず文は意を盡さず」との御言葉を拜借しまして、謹んで筆を茲に投じます南無妙法蓮華經、(二元)

● 觀經說時論

(四十餘年未顯眞實之効力如何)

在安藝吉田町 高田 日 暢

壽に予は「小折伏」を論述し、關報社の高氏に依て刊行するとを得、當國の念佛者に數百部を頒布し、彼我宗義の淺深邪正を明示して彼徒に警告する處ありき、爾來有志者の或は書讀を飛ばし、或は態々來り冊子を得て讀考せんと乞ふ者夥しく、忽ち一部をも剩さず與へ盡しぬ、而して讀者の衆くは予が主張を嚙認するもの歟、爾來數閱月間として何等質義又は反抗の聲もなし、然れども未だ淺劣を去て深勝に就くの丈夫なく、邪惡を捨離して正善を實修するの君子者現はれず、想ふに予が彼徒の宗教想稚頑也と豫斷せし如く、其信念も殆ど病的一種の隋力に過ぎざる歟、果して然らば終に覺起するとは不可能なるべきかと疑へり、然に客月上句當町隨一の念佛寺なる福泉坊に上宿せる同行藤川某(同行とは念佛宗の大信者猶ほ居士と云か如し)我信

徒某を介し、予が處に來て法義を尋求せんとを望むる、報ち之に應じ餘に日蓮上人の法門を宣傳しけるに、彼れ後ち烈火の如、憤怒し、言動粗暴甚だ穩ならず、遂に罵詈に渡る、予は餘りの事に呆れ、但止むなく激聲酬答、足下夫れ退亦佳矣……彼れ倉惶席を蹴て去りぬ、可憐彼は再會の縁絶せるものと思ひしに、後日更に人を介して懇に悔謝の意を表し、向後誓て温和能く法義を質問せんと乞請再三して止まず、予亦之を容れ相約して其月十七日の夜我檀越某の宅に於て會見す、彼れ年齒五十許、文字智謀に乏きを以て彼黨唯一の有勢家吉本某を辯護者として伴ひ來り戮力して予に衝らんとす、尙若干の陪席人を附隨せり、而して傍人の喧譟を避んか爲に、人員を定限して狼に他を収容せず、爾時雨天にも拘らず戶外に佇立傾聽するもの幾何なるを知らず、予亦信徒數人を立會せしむ、已にして互に面辞了り、予は先づ解答の用意上質問か詰難かを糺したるに、彼れ曖昧決答せず、而らば「小折伏」を克く讀了せしや否やを問ひしに、是亦不得要領、如斯んば條理整然と是非を明決する事は難かるべしと注意しぬ、然に彼は但猪進して自己の所懐を早く言はしめよと繰返すのみ、亦他を顧るとなき也、由て乞ふがま、聞くとにせり、則ち彼れは小折伏の序に「阿彌陀佛は此世界に降誕せず説法教化せしとなし」と述たるに就て、彼が依經に「佛力を以ての故に彌陀佛を見上りし」との文意を曲解して、彌陀は降誕出世せりと強て主張し、尙確證ありなき全く常識を缺ける無法の非難を發し、戶外の佇立者には是れ聞えよがしに喋々して互に呼應せる其情狀可笑亦可哀、而して彼が辯護者すら却て其不當を曉して止ましめたり、噫誰か彌陀を歴史的人物として誕生を募り之を承認せし者やある、斯る最もしからぬ事を能くも咄々せしとよ、阿々、次に亦「淨土三經は隨他意假説」と述たるに對して、彼は依經の「惠以眞實之利」の文を楯とし、一旦眞實と宣言したる佛教何ぞ變史し取消しするを得んやと頑抗す予は先づ開經の「四十餘年未顯眞實」の明文を提供して法華己前の羣經者方便虛妄也、就中淨土三經のみ豈此分域を脱せんや、今最も見易きの證を舉示せば、觀經は開世が未だ太子位の時なるに反して、法華は己に王位に登りし時なる明證、現に兩經文に見ゆたり、乃ち彼は前此は後なると諍ひなしと、尙其然る所以を立證數番して、何すれど兩經說時の前後に惑はんやと懇示しける、時既に深更に及びしを以て互に退席したり

次で翌々十九の夜彼れ反證を擧げ來て同問題を論難せんとなす、該夜内外の光景前に倍せり、而して彼れは始より眞宗中に録々の聞むある第一流の名望家某寺主を黒幕と仰ぎ、一々其教授を筆記し來り口傳を信持して之を著音器的に朗讀し高言するもの也、故に全然間接的とは云ひ難き彼れに臨む予は、宛も其黒幕と對決するにも似たらんかと稍々樂みつゝ、彼の論旨を聞けば其要實に左の如かりき

觀經は說處聽衆共に法華經に同じ、故に同時の經也云云

經の初に太子とあれども、若し王の實權なくば必ずや父王を窘むと能はず、然に逆惡を遂行したるを見れば其實權を握れると勿論也、故に次下には大王々々と稱せるに非ずや、是則父王に望めて太子といひ政權に對しては大王と云也、而らば太子即太王にして觀經は法華經と同時の經也云云

涅槃經に善見太子云云とあり、然るに此時は已に王位に居せしことは勿論なりと雖ども、而も太子と云ひ或は大王とも云へり、是亦大王を太子と稱せるものにして、太子(觀經)大王(法華經)の名稱を見て直に前後を別つ可らず、必ず觀經と法華經は同時の説也云云

法華經に韋提布子阿闍世王とあるは、母を擧て子を標すること西天の風習也、又惡逆決行後懺悔信伏せし時也と云はば、涅槃經に至て發瘡し當に隨獄すべしと云はれ、漸く信伏して佛に救はれしを奈何、是れ法華の時未だ信伏せず假に列席したるものにして、其後直に脱走して王宮に歸り、父王を幽囚したるもの也、而して此一大事變を開き佛は王宮に趣きて說法せしもの則觀經也、闍王其時の報苦涅槃の初に現はれたること疑ふ可らず、是れ兩經同時の説たる確證なり云云

彼の長談議に一二批評を加へし時已に夜半に到り、退座すべきを以て宿題となし、次回に説破すべきを約して別る、其後相互協定の上本月七日の夜予が寺を會場となし、前に達ひ門戸開放公衆の傍聽を自由にせしかば、彼黨潮の如く集來しける、予は御本尊に敬禮受誠して、彼徒が邪心を速に轉し正法に流入せしめ玉へと祈禱を捧げ、畢て大衆に向ひ嚴正謹聽善く兩議を默考すべし必ず擾亂せされと申し渡し、徐に當事者に對して左の如く、諭告したり

觀經の説は法華經の如し

道理 (1) 性欲不同に隨て説きたる一機一緣の小法也(王は八戒を要求し夫人は西往を請願し佛便ち應説す)

(2) 得道差別終不得成无上善提の教門也(王は阿那含を成す夫人は無生忍を得終に授記作佛せず)

(3) 隔歴差別は權教爾前經の説相也(此身此土を厭離し未だ人土の顯本は毫も説かれず)

文證 (1) 觀經云爾時王舍大城有二太子一名阿闍世、隨三願調達異友之教、取三執父王須婆沙羅、幽三開置於七重室內云云

(2) 全經釋(善導序分義)云太子者彰其位云云

先に列坐衆を擧示して次に爾時と云ふ彼の外史に方此時と同一也決して往時を指したるには非ず、而して茲に太子と云へるは佛滅の年四月より七月に至る九旬の間、阿闍世王施主となり千人の聖者が藏經結集の時、阿難高座に登りて佛説を再演し、文殊已下衆聖の筆受する所にして、佛陀說法當時の實地真相を有の儘に呼び現はされたるものなれば、必ずや大義名分を明にせる正當の呼稱也、故に有一太子とは正しく其當時の位階を呼ばれしもの、則ち名實兩全の稱へなりし事勿論にして、尙其當人阿闍世も阿難文殊等の衆聖も齊しく承認する所也、さればこゝ「獨明佛正意」と歌はるゝ善導が、故らに「太子者彰其位」と明釋せられ、觀經説時は實に太子位の時なりしと遺訓せしもの也、斯る明確の事實に對し佛徒誰か疑難する事を得んや、然り而して爾時は提婆達多世に在りて太子を教唆し、父王須婆沙羅現に幽囚中なれば、兩人共信に生前の事なるを記憶せられよ

現證 (1) 和漢諸宗本山大寺の經藏を檢尋せよ、必ず皆方等部に攝収せり、現今本願寺の藏經も亦爾也

(2) 念佛宗の先師等絶て同時説を主張せず、但中頃法然親鸞の末弟等、論辨的に同時説を構成したり處同きを以て同時の説也とは不當の甚しきもの也、華嚴經は僅に三七日の説なれども七處に轉演し、又無量義經は前時法華經は後時なれ共同處に説かれたり、故に一經必ずしも同處ならず、經に前後あれ共同處に説さしものあり、豈處同を以て同時の説也と謂ふの理あらんや、譬へば京都

進難



本願寺に毎度説教ありと雖も、時日に必ず前後あるが如し、亦例知すべき也  
 聽衆同一とは亦當らず、法華經には菩薩八萬とあれども、觀經は三萬二千也(是一)法華經には觀  
 音勢至在り、觀經の時は西土に居せり(是二)法華經には闍王目連等と共に在坐せり、觀經には闍  
 世目連を罵詈して同坐せず(是三)相違尙多けれ共略す

(2) 實權を握れり父王に對して太子と云ふ等、論者の瞞言よもや實權即王位也とは言はるまじ、而も  
 却て予が論明を助證するに成りなん、曰く眞正の王位に在す父王が存すればこそ、其父王に對し  
 て實に阿闍世は未だ太子の位たる也、然るに專横無道不孝暴惡にして父王を害して其王位を奪は  
 んど欲せる權慕に恐れて、臣下等皆大王々々と潜越不當の稱呼をなすつゝ、而も諍争せるもの也、  
 是則ち實際は未だ王位と得ざりし明證也、故に十誦律卅七に太子王位を貪り父王を害せんとせし  
 れば、父王恐れて物品を與へ慰諭して止ましめんとす、爾時臣下等太子を大王と稱せし由見ゆ、  
 是れ惡逆未遂の時すら已に大土と潜稱せし之證也、況や現行犯中觀經の時既に於てをや、然れども  
 未だ王位を紹ぎ得たるには非ず、決して名實兩全の公稱には非りし也、且惡友提婆は太子に教ゆ  
 るに父王を殺害して王位を襲ぎ新王と成れど之を以す、故に觀經は之を遂行せんとする時なれ  
 ども、未だ父王を害し畢らぬに由り、尙ほ王位を紹ぐこと能はずして憤懣せる場合、乃ち眞に太  
 子位の時たりし也、然り而して實權と王位必ずしも一雙ならず、臣として君を、子として親を害  
 害せしこと實例多し、我國政權武門に歸せしこと殆ど七百年、實權を握りし者多しと雖も、一  
 人たも王位に登ることを得ざりしに非ずや、不祥の事なれども王位と王權必ずしも離合一定せぬ  
 時あるを奈何せん、假令太子が政權を掌握せしども、直に之を以て王位を紹ぎ得たるものと云ふ  
 可らず、論者思之

法華經之說時は觀經の己後なる明證  
 道經(1) 今正是其時決定説大華と宣ひ、佛の本意に隨て説きたる大住、如來等無異、此一初卷三三三八

文證

- (1) 法華經序品云、韋提希子阿闍世王、與若干百千眷屬俱、各禮佛足退坐一面乃至合掌一心待云云
  - (2) 法華疏云、以害父竟不釋父云云
  - (3) 涅槃經梵行品云、王法者謂害其父則王國土云云
- 明文赫々、阿闍世王と擧げ清淨衆と同供して、佛も大衆も許容して聞者たらしむ、若しも中心に父王謀  
 殺の惡意を懷き、假りに列席したる者ならば、合掌一心待と云ふ可らず、且佛も大衆も排斥して一會に  
 収容せざるべし、斷して信伏後の時也、疏の如く父王已に害せられて生存せず、故に之を標せず、大經  
 の如く既に父王を害し已て王位を紹ぐことを得たり、故に其位を彰して世王と云ふ也、尙ほ大經梵行品  
 に「昔有王名曰羅摩、害其父已得紹王位」として九人の王を例擧し「如是王皆害其父得紹王  
 位」と云ひ、更に現在の三王の實例を明示して、昔も今も阿闍世の如きものあることを疑ふに由なから  
 しむ、去れば疏の文と導の釋と自ら影畧互顯の趣き最も神妙也、茲に知ぬ王とは其位を彰す、眞に王位  
 に登踐し王位を紹き已りて後、法華會に列席せしもの也、然るに觀經は未だ王位に登らぬ已前即太子位  
 の時たり也、隨て法華の時父王既に被害の後なれば世に在さず、觀經の時既に幽囚中即生前の事た  
 りし也、是れ豈兩經の前後分明なるにあらずや

(4) 普超經云、阿闍世從三文殊、懺悔、得三柔順忍云云  
 大經迦葉品に、觀經普超經の當時を述して曰く、善見叔其父王閉之城外(中略)即往母所前奉母  
 髮一振刀欲斫中畧爲者婆故即便放捨、造斷父王衣服臥具飲食湯藥、過七日己王命便終、善見  
 太子見父喪己方生悔心云云と、而して普超經は法華己前の説なること、三國諸宗學者の定判ありて

方等部とす、然るに此經の時已に父の喪するを見己て文珠の所に往て懺悔したり、故に悔心を生せしは惡逆決行後也、而して觀經は逆行中の時なれば遠く法華已前の經なること詳ひなきものをや、己に遠き己前に普超經に於て歸伏せしに由り、其後の法華會に清淨衆として列生せられたること彌々明了也、刹へ法華の時は父王を害し畢れり、世に居らぬとの明證あるものを、其亡き父に對して惡逆を加ふべきの理あらんや、父王を害し己て王位を紹くことを得たりとの經釋と共に、現文最も有力の證憑十分にして兩經の前後細々分明なるに非ずや。

(5) 報恩經云 佛遣阿難往到地獄、問尋提婆達多即言、善來阿難如來猶能憐念於我(中略)我處阿鼻獄猶如比丘入三禪樂云云

觀經は達多現存して逆を太子に教ぬ、其罪報として報恩經の時地獄したる事、文に在て明白也、而して報恩經は方等部なれば法華已前の經なる事、是亦古來識者の定めて異議なき所也、是故に後の法華經の時は地獄に在り乍ら佛の記別を授與せられしに徴せば、觀經法華經の前後實に分明なるにあらずや

現證

(1) 古來諸宗の經藏に、皆觀經を前とし法華を後として安置するは、識者の目撃せる所也

(2) 諸宗の學者高僧就中我先師大德等、觀經は一代五時の佛說中には第三方等部にして、法華經は遙に後時の極說也と、既に定まれる主張を遂げ畢んぬ

遺難

(1) 法華に母を擧て子を標するは是れ西天の風習也と、何う其れ然らん、曰く子を擧げ父を標し(經云佛子羅雲)子を擧げ母を標し(經云羅喉羅母耶輸陀羅比丘尼)或は佛姨母摩訶波闍波提比丘尼と説かれたる如き、皆是時處度の宜しさに隨、宣告せらる、必ずしも母子と標示するものに非ざる也、豈概論すべしや

(2) 涅槃經に太子大王と稱呼せりと謂つて、同一時間の語なるが如くに解せられたり、然るに闍世の事を説きたる迦葉品梵行品は共に今昔談ありて、其昔日太子位の時の事を説くには太子と云ふ、如今大王位の時を説くは大王と云ふ、然れば取て區別せず、區別せり在考すべし、故に迦葉

ばならぬ、であるけれども唯想像では何人も承服することが出来なひので、とふしても研究した結果を以て始めて服従することが出来るのであるから、我等が攻究し來れる處を少しく披瀝して見やう

日蓮聖人の柔順なる方面を窺はんとするには、聖人が女性に御廻りになつた御文章が最も明白に之を寫してあるから、我等はその御消息によつて検討し來るの適當を認めるのである、夫故に此種の御文章を通覽し、まして、所謂日蓮聖人の温情を少しく語るべく茲に筆を進めるのでありませう、聖人の女性へ御遣しになつた御消息は凡う百通ほどありまして、拜讀しますると最も静かにして穏やかで、而して懇到周密に筆を運ばれ親切叮嚀に事がらが書き記されてあつて、實に一讀三款の外はありませぬ、之を以て日蓮聖人は強柔二方面を有せられたお方であつたと言ひ直に了解が出来る、惡魔の様な鬼神の様な懼ろしき日蓮聖人が、一轉して佛の様な菩薩の様な日蓮聖人となるので、血もあり涙もあつた人でありしと云ふことが、今日の我等に諒知することが出来るのである、とふして多くの女性の中にも、最も澤山にお送りになりましたのが、四條氏の妻と南條氏の母と富木氏の妻松野氏の妻及び太田入道の妻機敷の女房等でありませう、是等は御消息の多ひだけだけ聖人の知遇の厚かつたことが断らかである、此外千日尼窪尼持妙尼妙密坊等に與へられた御文章が數十通ありまして、其人に應じてそれ〱綿密に懇切に、文章に於ても意義に於ても得べきだけ平易に簡明に、教義の説明修行の方法より女性としての行狀及び任務等に就て諄々として教訓せられてある處を拜しませうと、實に我等の豫想外に出て居るので、唯驚歎するの外なひのでありませう。

女性として天賦の任務たる出産の事に就て、四條金吾の女房へお送りになりました御文章がありませんが、此種の御書は餘りに類のなほ珍らしき御文章でありまして、出産のことに併せて信仰をお非めになつた處なんぞは、實に懇切至極であると言はねばならぬ、

懐胎の由承はり候(中略)就中夫婦共に法華經の持者也、法華經流布あるべき種を繼所の王子出生あらん目出度覺へ候、色心二法をつぐ人も争かをうなはり候べき、とくくことうされ候はめ、(中略)信心の水すまば利生の月必ず應を垂れ守護し給べし、とくくうされ候べし、法華經に云く如是妙法、又云安樂産福子云云

四條金吾夫婦は、實に聖人の爲には非常に外護を盡した人でありまして、當時の檀那中唯一の人であつたことは皆人の知る處でありすが、聖人は夫婦共に法華經の持者であるから、法華經流布の種を繼ぐ子であつて眞に目出度事である、法華經の持者たる夫婦の色心二法をつぐ子であるから、とくく生れるに相違なひ信心の水に利生の月が浮ぶと云ふ最も見易き例を挙げ、安樂産福子の經文を提さげ來りて産婦の意識にむかつて大安慰を與へ、併せて信仰を勵まされてあるなど、實に周密なる用意であつて敬服の外ありませぬ、聖人が出産のことに限らず何事にされ總てを教義的に解釋を與へられてあるは、宗敎家としては尤もの義であるけれども、到底吾人庸愚の者の企て及ばざるところであります、

さて亦此女人に就ては、内典外典ともに非常に排斥されて居る、先内典にては地獄の使大鬼神、又は大蛇曲れる木若くは佛種を重るものであると新舊に列擧してあります、亦外典の中には、異は三女より起るの、無女樂と言ふて樂器類と云ふ人が、女人を生れしむる事とするとか、三徳と言ふて家に在ては親に敬ひ、しては夫に従ひ老ては子に従ふと言ふことなどは、皆女人を排斥した事情であります、日蓮聖人は是等の例を澤山お示しになつて、法華經ばかりには此經を持つ女人は一切の女人に劣たるのみならず一切の男子に超てをる、夫故に一切の人にうしられても、いとをしと思はるゝ男に不便と思はれたらば、うれに遇たことかなひと同じく、一切の人は悪むならば悪んでもよひ、釋迦多寶十方の諸佛等に不便と思はれさへすれば何も苦しむことはなひ、法華經にだにも讀られ奉れば何も苦しむことはなひ、特に左衛門殿は俗の中にては肩を並べる者もなひ法華經の信者だから、是に相連身の上は日本第一の女人であると、是又四條金吾の女房にお送りになつた御返事の趣意であります、女性に對しては最も親切なる御教訓と申さねばなりませぬ、

又月水鈔を拜讀して見ますと、大學三郎の妻の間にお答へなされたものであります、是は女人の月水の時の心得方を示しになつた御妙判でありますして澤山なる御書の中にも特に例のありませぬ御文章であります、少しく引いて見ませぬ

日蓮粗教を見候にも、酒肉五辛縁事なんどの様に不淨を分明に月日をさして禁めたる様に、月水を忌たる經論を未だ勘へず候也、在世の時多く盛んの女人尼になり佛法を行せしかども、月水の時に申して嫌はれたる事なし(中略)委細に經論を勘へ見るに、佛法の中に隨方毘尼と申す戒の法門は是に當れり(中略)若し然らば此國の明神多分は此月水をいませ給へり、生を此國にうけん人々ば大に忌給ふべき

歟。但し女人の日々の所作は苦しかるべからずと覺へ候(中略)月水の御時は七日までも其氣のあらん程は、御經をばよませ給はせして、空に南無妙法蓮華經と唱させ給ひ候へ云云。

斯の如く女人が月水の忌に就て其心得を詳々とお諭しになつてあります。此御書の最初に於ては最も分明に法華經の修行法を御指南なすつて、而して「五障の雲厚んして三従のきづなにながれ給へる女人なんど御身として法華經を御信用候はありがたしなんせども申すに限なく候」と、斯様に大學三郎の妻を御賞讃なすつてある、其下に至つて日月は東より出させ給はぬ事はありども、大地は反覆する事はありども、大海の潮はみちひぬ事はありども、破れたる石は台ども、江河の水は大海に入ずども、法華經を信じたる女人の世間の罪に引れて惡道に落る事はあるべからずと列擧し來られまして、更に一層の信仰を促されたなごは、實に圓轉活潑なる御文章と申さねばなりませぬ。

それから男女の情愛に就きまして、妙心尼へ御送りになりました御書があります、能く男女相思の情愛を應用せられまして、筆をお進めになつてあります。

親子の別れ主従の別れいづれかつらからざる、されども男女の別れはどたとへなかりける物なし、過去遠遠却より女の身となりてかゝる思ひ候ひしが、此男こそ最後の善知識なれ、猿は木をたのみ魚は水をとのみ女人は男をたのみ、別れの惜き故にがみをうりて袖を墨に染させ給ふ、争か十方の諸佛も哀ませ給はざるべき、法華經を捨させ給べきと誓み給ふべし(中略)「去年もうし今年もつらき月日哉思ひはいつもはれぬ物ゆへに、唯々法華經の題目を唱へて御祈り候へく候、南無妙法蓮華經」

此種の御書は餘が筆跡にありませぬが、婦人が夫たよるとする處の夫に別れ、人世の夢に打ち込み世を果敢なみて憂う年月を送つて居る、其心情にむかつて慰藉を與へられ、併せて信念を進められてありますなごは、實に信仰に活火を與へられたものと申さねばならぬが、由來宗教なるもの、眞價は斯る處に於て多く見出されて居ると、余は信するのであります、さればと云ふて法華經は厭世觀悲哀觀を説いたものでなひことを吾人は承認せねばならぬのである、日蓮聖人の御在世に於て親しく御教化を受られた女人の中でも、非常に心弱き人と又確かなる人とあつたことは、御遺文を拜見しても察知することが出来るので、夫故に聖人は其人に應じて種々なる方面より信仰を鼓吹せられてある、乙御前の如きは女性の身として海山千里相隔つる佐渡ヶ島へ、狂浪怒濤を渡りて日蓮聖人を御訪ひなすつたなごは、洵に心強き女性であつたと云ふことが知れるのであります、乙御前へお遣はしになつた御消息中に於て斯かに此事をお認めなすつてあります。

御氣を蒙り佐渡ヶ島へ渡されしかば訪ひ問ふ人もなかりしに、女人の御身として旁々御志ありし上、我ど來り給ひし事うつゝならざる不思議也。

さて亦此御消息の始を拜讀しますると「女人は夫を魂とす夫なければ女人魂なし、此世に夫ある女人すら世の中渡りかたくみへて候に、男もなくして世を渡らせ給ふか、男ある女人にも勝れて世の中かひくしをばする上、神にも心を入れ佛をも崇させ給へば人に勝れておはする女人也」之によつて乙御前は氣丈の女性であつたことが察せられませるのである、それから佐渡に於ては阿佛坊の妻なる千日尼でありませぬ、此夫婦は聖人の在島中毎夜香卒の隙を窺ひ聖人を御供養なすつた人で、聖人は此夫婦の爲に其生命を全ふせ

られたと言ふもさしつかへなひのである。聖人の延山へれ登りになりましてからも、五年の間に三度までも阿佛房を使として聖人を御訪ひ申上たことが、御書にありませうが、最も篤信のお方であつたに相違ない、今佐渡御在嶋中の有様を記されてある御消息を舉て見やう

日蓮佐渡の國へ流されたりしかば(中略)地頭念佛者等は日蓮が菴室に晝夜立副みて、かよふ人を強にまどはせしなむ申せしに、阿佛房に禮を持せて夜夜夜中に御渡りありし事何の世にか忘れ候べき、唯偏に慈悲の佐渡の國に生れ替らせ給ふ歎云云

此御消息を拜しますると、聖人が佐渡御在島中の有様が目前に見へる様な意持がします、如何に阿佛坊千日尼が佐渡に於て給使を致したかを考へねばならぬ、且又聖人が此時の事を如何に肝銘せられたかを知ることが出来るので、日蓮聖人の御教化を受けた女性の中にも、乙御前の如き千日尼の如きは特に身を以て外護をせられたことは申すまでもなひのである、

御經十卷有合せて御座候へば送り進せ候、日蓮戀しく御座まさん時は學乘坊に讀せて御聽聞あるべし、此御經をしろしとして後生には御尋あるべく候、(千日尼御前返事)

日蓮聖人の婦女に對する御教化は、總てを感情に訴へて如何にも感じ易き方法を採りになつてあつて、日蓮を戀しくしたのはまさん時は學乘坊によませて御聽聞あるべしとの御言葉の如き、至れり盡せりと敬賞せねばならぬ、元來女人の性質は總て情に脆さが故に、随つて信仰も又其感情に向つて注入すべきは女性に對する有教法と申すべきである、されば日蓮聖人の女性に對しての信の教化は多く感情を前として其信念を感ぜられてある、故に其言は女性に對しての感化の言である、是れを差支がなからんと思はれる、

古郷の事遙かに思ひ忘れて候ひつるが、今此あまのりを見候てよしなき心思出でうくつらし、片海市川小湊の磯の邊にて昔見しあまのりなり、色形味ひもかはらざるが、なぞ我父母替らせ給ひけんとかたちかへなるうらめしさに、涙も押へ難し云云(新尼御前返事)

御此書を拜見するに、字々句々、皆感情の發動でありまして、女性のみならず何人でも一讀のものに、綿々として情緒を動かされて同情の涙を潑々に至ることは、少しも疑ひを容べきことでない、うれと同時に懇切なる教義の垂訓に浴せられて、精神的に信仰を發揮するは議論を用ふるまでもなからんと思はれる、次に尾張形部左衛門の女房へ御遣しになりました御書がありませう、之は父母孝養と言ふ事につひてお認めになつてありますが、聖人自身の母に對する感想を筆して法華經の功德を説き、而して刑部左衛門尉の女房の母なる人の十三回忌の供養に就て孝養なることを委しく御教訓なされてありませう、

父母に御孝養の意あらん人々は法華經を贈り給ふべし、教主釋尊は父母の御孝養に法華經を贈り給て候日蓮が母存生してをばせし時、仰せ候事を餘りに背き進せて候しかば、今ぞくれまいらせて候が、あながちにくやくしく覺候へば、一代聖教を捨てて母の孝養を仕らんと存じ候間、母の御訪ひを申させ給ふ人々は我身の様に思ひまひらせ候へば、餘りにうれしく思ひまひらせ候間、書付て申候也、定めて過去聖靈、忽に六道の垢穢を離れて靈山淨土へ御参り候らん云云

聖人が自身の母に對する其感念に比較して、我身の様に思ひまひらせ候へば餘りにうれしく思ひまひらせ候

この同情を以て、此女性が母の十三回忌の供養を捧ぐる其厚き志をめでられまして、初めに於ては目連尊者の母を餓鬼道に救ひ、釋尊の摩耶夫人の爲に割利天に於て摩耶經を説て母を救はれたる事例を引きて孝養の必要なることを示し、今生には父母に孝養をいたす様なれども、後生の行末まで問人なしとの事實を擧げ、外典の孝經は唯今生の孝のみを教へ後生の行末をしらずと説き來つて、此女性の志の深きと法華經の功德の廣大なることを教訓せられたる處は、如何に無情の人であつても感涙に袖を濡すではありませんか。今度は親子の恩愛に就ての御書を求めますれば、南條七郎五郎殿の四十九日忌の爲に供養せられた其御返事でありませす、是は七郎五郎殿の母上へ宛られましたもので、深き恩愛の其有様になぞらへて御書なされてありませす。

かゝるめでたき御經を、故五郎殿は御信用ありて佛にならせ給ふて今日は四十九日に成せ給へば、一切の諸佛靈山淨土に集らせ給ふて、或は手にすへ或は頂をなで或はいたゞき或は喜こび、月の始て出たるが如く花の始めてさけるが如く、いかに愛しまいらせ給らん

親子の切なる恩愛の情そのまゝを移して、法華經信仰の其功德によつて佛果を成せられたる其状態を筆せられた筆曲の筆のあと、拜讀する我等までもうろくに同感の情に堪へなひ、まして上野殿の母御前は、斯る御返事に接して如何に嬉し涙に咽ひしかを思ひやれば、聖人の大慈に我等は覺へず感泣するのであります。猶ほ此御返事の最末に至つて、「今年九月五日、月を雲にかくされ花を風にふかせて、夢寐夢ならざる熱、あはれ入しき夢かなど歎きあかして四十九日、さける花はとゞまらばりり、老たるは返りては子

(3)

士生地阿夷羅拔提河邊沙羅雙樹間一日夜の御說法なるに、既舍利城に赴く時の事を説かれ、又頻婆沙羅王提婆か生命中の事をも宣べ、或は「在問三相師三相師答云是兒生已定當害父」にて、太子か生れぬ己前の事など種々在時の物語もある也、然らば假令太子の語ありども、大王の當時を指稱せるものには非る也、必ず混一視する事勿れ

發誓…當墮惡道…の疑難を會せば、天台云普超經云、阿闍世從三文殊…懺悔得…柔順忍…中略說…法華一時預…清淨衆…至…涅槃時…引…逆罪者…何異…迦葉於法華…受記於…涅槃…不堪…付屬…不可…迷…途而或…其本也…云云妙樂云說…法華一時者據…得…柔順…在…法華前…故在…法華…爲…清淨衆…至…涅槃時…身瘡初發得…初果…故知爲…引…逆罪者…耳、此乃全作…大權…釋…故引…迦葉…爲…例、若作…實行…者在法華會時雖…言…清淨、未見…獲益…益とは似佛眞菩薩、果也、准…理應…云…障未…除機未…動、至…涅槃時…障欲…除機已動故聞…佛記…頌解歡喜云云已上の解釋明了、別に辨するに及ばずと雖も、爲引逆罪者とは闍世は實の惡人に非ず、權者として假に惡逆を作し、其苦報も經力に由て消除すると凡夫に示せるもの也、則ち己前の時惡逆を作し、其次の普超經にて懺悔したれば、法華の時は既に惡心を翻して久き後なるが故に、清淨衆として列座せしと勿論也と雖も、涅槃の時に至て此經の功力は能く五逆罪を消滅することを示さんが爲に、身自ら昔日の惡逆の報に由て瘡苦を感得し、遂に墮獄すべきと見ゆし、而も此經力能く滅罪すると實際せんが爲に、佛前に詣で、懺悔し救護せられたる也、是れ恰も迦葉は成佛、法花にてしたる人なれば、敢て附屬に不堪者には非れども、而も自ら不堪と云ふは、皆是れ權者が實凡を誘引するの化儀なるか如しと也、是故に發瘡當墮等は決して法花列座後逆罪を行したるには非ずとの意也、若し亦實惡者として見れば、法華の時清淨衆に入たれども改心後功罪未だ償はず、涅槃の時は信仰の功德漸々積累し、彌々罪障全滅し畢らんとする時の發瘡也、譬へば燈將に消んとして一旦光を増すが如し、罪障亦

以爾也故に權者實者何れより論ずるとも、涅槃經闍王の事は念佛者が同時説の證憑とはならず、却て前後順序を明すに利ある也

重て上の要點を明示せば

觀經は阿闍世太子位の時也、法華經は阿闍世王位の時也、觀經は提婆達多在世の時也、法華經は提婆達多墮獄の時也、觀經は頻婆沙羅王在世の時也、法華經は被害没後の時也との誠證分明なれば、觀經は前にして法華は後なる疑難ある可らず

上來解決せる如く、兩經説時の前後あると道理文辭等彰明較著、苟も有心の士復び諍ふの要なき也、然らば如何に詭辯巧謀して、無得道致方便虛妄教の分域を逸脱せんと煩悶し、強て同時説を云ふと雖も、終に識者を講過すべからず、本より正當にも實義にも非れば也、矢張觀經等三經は法華宗特有の利刀なる四十余年未顯眞實……一撃の下に斃れ、正直捨方便と廢捨せられて、全く斷頭場裏の露と消失せたるの今日、如何に痛哭すとも亦救命の詮なく、眞に復活の術なき也然るに其死骸を懐て尙ほ活動すと謂へるの愚や悲むべく、剩へ不老不死の經王法華に競争を試んとするの狂や憐むべきもの也云云

予が論告中、衆皆謹聽して一言の聲聲者なく、滿場至て靜肅なりき、爲に予は之を斥論相對説として魔事なく宜へりける、其れより進んで本論絶對説を提供すべき筈なるが、時間に限りあれば更に後日を期して辨明せんとを約し、閉會を告げたり時實に夜半なりき

明治壬寅七月中浣、蓮華寺書窓に記して遙に團報社に寄す



統一圖報

●至師隨行日誌

(接前)

高木 松太郎

歸途八時四十八分太牟田驛に淺見林惠氏と別れ、久留米本泰寺に着せしは午後十一時頃なりき

十七日(晴) 朝來山本師を首め徳代諸氏の案内により當市商工業の景狀を視察し名所古跡を探りて、足稍々疲るゝを覺ゆる頃久留米城趾に登れば、圍らざりき一隊の信徒は先發して此處に一行の來るを待てり、準備は整頓せも園遊會は開れぬ、城趾より下嶽すれば右に市の殷盛を左に筑後川の清流を臨み、緑野十里一望廣瀾風光至佳自ら心氣の暢達を覺ゆ、鑿て酒數行耳熱するの後老樹鬱蒼の間に逍遙し、思ふ儘なる遊樂は小林僧正にも最と御満足に思され、此地布教の將來に就き制度上の改進黨の本義等何くれ懇切に説示せられ、山名師亦傍より本土九州の布教聯絡に就き今後の方針を語られければ、一同の歡喜山本師の滿悅共に色に現れて滿坐思はず我を忘れて興に入り、加るに仙波氏の謠曲(俊寛)など興を添ゆるものあり、十二分の歡を盡

して、善男善女山内に充つ、暫時休憩の後山本通辨師偵波徳義中原傳藏橋本市二平岡藤助平岡保太郎の諸氏其他數十名の信徒と車を連ねて停車場に至れば、一同別離の名残を惜み涙を拭へるを見受けたり、午後四時四十分發の列車に車窓衆と盡せぬ名残りを告げて五時三十分二日市驛に下車、直ちに脚車を驅りて武藏温泉場の延壽館に宿り、樓上遙かに天拜山を詠めて管丞相の往事を偲び、旅の勞れも打忘れて詩歌の雅評に更たくるを覺へざりき

十八日(雨) 午前七時旅館を出て、管公の千年祭も序ながら巡覽を了へ、再び二日市驛に歸り、時十九分發同四十四分博多着、折しも降雨盆を覆すが如く街路泥濘歩行甚だ困難なりしも、小林老師には此雨中車に乗りなば思ふ様見物も出來ざらんと御洗足の勇ましき御振舞ひ、六十路を越へませし老軀とも覺へず、是には山名師も生も敬服閉口の外なかりき、西の大坂を以て名高き博多の市街一通り見物して二時三十四分の上り列車に乗込み、箱崎の八幡も車窓より見過し五時廿五分門司着、うれより海峡を船にて馬關青海樓に投せしは午後六時半なりき、此日降雨劇甚加るに疾風をさへ

交へ、爲に馬關の巡覽を果さざりしは遺憾の極みなり

十九日(快晴) 午前八時五分發急行列車にて廣島に歸るべく申妻驛に着す、大橋日蓮師に迎へられて本照寺に入りしは午後一時四十分なりき、何時もながら大橋師の周到なる饗應に旅装を捨て、入浴閑坐、恰も好し比來病を當寺に養ひ居らるゝ吳港の田川八重女同孝子讓母子の計ひとて、按摩の待てる杯萬事蚤さ處に手の届く注意に半月の旅の勞も忘れてけり、折柄妙詠寺の島田氏の懇問吉田町の高田日暢師信徒惣氏矢野幸一郎氏と出迎の來廣あり、此日は九州布教の物語杯打くついで安息するを得たり

三十日(晴) 廣嶋より吉田迄十一里の長程腕車にて行く事とて、何れも可成輕裝荷物も手輕に纏め、高田師の先導にて一行四人午前八時本照寺發、矢野幸一郎氏は自轉車にて先發せり、十一時可部町着、先着の矢野氏は此地信徒惣代入江善平民と共に一行を迎へ、入江氏宅にて晝餐の饗應を受け、此地の布教は歸途立寄る事と約し、零時三十分出發上根の宿に到れば、此處にも信徒惣代世良幸二氏の自轉車にて出迎へるあり、矢野の陳列の陳列の山を築き、先發し、一行の意の後吉田とて小林老師にも長途乗車の疲れもお厭ひなく、暫時休息の後法座を開く事とはなりぬ、六時高田師の紹介もて山名木信師登壇、信徒惣代世良幸平氏を始め重なる人々感儀を正して高座、近く左右に非常を警め、會場の警護いとも嚴重と見受られき、師は開口一番涅槃經の不樂聞佛法中怨の全文を提唱し、人文の發達は智識の交換に在り法の邪正を定るは經典の比較研究に依ると説き起し、暗に捨閉的敬遠主義の蒙を啓き、徐々として本論に入り、彌陀釋迦二佛の本末に就て一月萬影の聖斷を詳論し、當世念佛者無間地獄なる旨を結論せられ、權徒少しく色めく頃小林大僧正現下は安祥として獅子の座に上られ、法音院々十遍計り御唱題の後慈母の赤子に接する跡度もて彌陀釋迦二佛の慈悲の優劣に就き、約二時間の御親教あり、此間靜肅謹慎恰も人なきが如く、其理義の公正と説述の平明なる、眼に一丁字なき老幼婦女にも容易に會得するを得、滿座感に打たれて内は信徒の増信と外は權徒の動搖生疑、中にも淨土宗の二三の信者が我知らず唱題修行に同化され平素念佛の口もて玄題誦唱の妙境に入りたるを見受けき廿一日、廿二日、廿三日共晝夜二回の説教は山名師の

町蓮華寺に着せしは午後五時弱なりき、信徒數十名と高源寺の堤正音師は山手と云へる約一里の村外れ迄一同禮服にて出迎られたり

此地は昔に名高き安藝門徒の巢窟とて、所謂四面楚歌の中に孤立せる蓮華寺は布教の困難なる想像の外にあり、聞く處によれば法華信仰の者は其人材の如何によらず、市の議員とか町長とか重要な位置に用ひず、商人をば多數を頼める念佛徒等陋劣にも營業上に妨害を加へる杯、其頑強迫害の好手段名狀すべからずとかやされど寺主高田師は能く此迫害に耐へ、頑黨に對抗して折伏逆化弘教日々に益々盛んなるより、彼等念佛徒怨嫉いよ、甚しく、往々壯士勢の輩に見舞はるゝ事さへあり、夜中道行く時杯は瓦石の飛來る事さへ珍らしからぬ由、而して此迫害は反比例に益々我信徒の志念を強固ならしめ、邪徒退治の教戦は數々起り、其程度彼れ念佛徒は失敗を重ね、今はあたらぬ聲は蓋ぬ開ぬが何より上分別と敬遠主義に漸く味方の信徒を保つに汲々たる折柄、此度の御巡教内信徒の歡は言はずもかな外念佛の族も何しろ大僧正現下の御親教を聞ては、流石に見ぬ振り聞かぬ振りもならずや、當には似ず情熱に出るもの少からず、一行の寺に若し頃は早や

廿四日(曇) 午前中特に信徒の爲め一座の説教あり、懇切に即身成佛の安心を説示せられ信者の感泣止まざるものも多かりき、午後二時世良幸平氏の宅に請侍せられ回向後説教一座あり、夫より郡山の城趾に上り毛利公の舊蹟古跡を一覽せり、麓よりは六七町もありと覺しき山の上迄乗車の儘現下を挽き上げしも、此地信徒の信仰表白の一として見れば報道の贅ならざるを知り給ふべし、夜に入り寺にて慰勞の饗宴あり、席上親下の有益なる法話に次て山名師の演説高田師の述懐談等頗る盛會にて、散會を告げしは三更過る頃なりき

廿五日(晴) 高田師は猶ほ名残りを惜み廣嶋迄隨行せらるゝ事となりぬ、午前七時發數十の信者に見送られ盡きぬ名残りを町外れに止め可部町に向ひぬ

其後高田師の報によれば、大僧正御親教已後の吉田



町は我門の教勢頗に昂り、現に有力なる全佛信者に

して改宗を囀りしも、親族故舊の注否否迫害の強盛

なりし爲一時意を果さるも、心は既に我門に移り

居れり、此一事を以て見るも今回の御親教が如何

に念佛門徒に刺戟を與へたるか、此地布教の困難如

何程なるかを察せられたし云云

大橋日襲師入江善平同寛六氏等外數名の信者に迎へら

れ、寛六氏の宅に着きしは正午なりき、直ちに弘通所

に到り晝夜二回説教大橋高山山名の諸師演了の後老僧

正の御親教あり此夜善平氏の宅に手厚き待遇を受け一

泊しぬ

廿六日 廣島に歸り廿七八兩日開宗紀念の法要あり

演説は晝夜其非常の盛況にて、眞宗學林生の質問等記

すべきもの多かれど、既に廣嶋よりの通信掲載された

れば茲には略しぬ

廿九三十の兩日は休息、三十一日前八時發車岡山に歸

る事とはなりぬ、大橋嶋田高田の諸師信者數十名桐山

孝女等停車場迄見送られぬ、午後三時庭瀨驛着、能仁

事一師久城茂太郎板野某等此驛に迎られ、小生は無

據要務の爲め此處にて老聖及山名帥に分袂し、津山に

ての再會を約して中鎮線に乗替へ勢里作の美田郡原

るが如き程に、唯唯の深更時を過せし、新壁正殿

後に崎嶇し、老松喬樹前に盤膝し、涓々たる溪流峽壁

に懸流し、勢堀たる水天、樹間に往來する靈境にあり

て、如何に聖祖上人配所觀月の當年を回想せば、今の

此の月、岩、松、土、山何れの所にか昔日の印象を刻

むものぞ、樹の間を洩る山月の光、松葉に結ぶ白玉の

滴たり、苔蘚す巖の蹉跎たる眺め、果して六百五十有

余の時昔とは、遺々異なる乎、噫々異なる歎

第一日 開會式 (七月廿五日曇)

數日來の暴風雨未だ其餘怒を収めざるか飄々たる

佛現寺門前の裝飾の宗旗、枯葉を撒布する八段一百二

十有余の石階を昇り極むれば、赤鸞天に翩翹するかと

まがふ朱塗の山門、昔を語る空線高かし、正面の大堂

八間四面の霞閣は、此れ我か講習會の聖堂なりき、

高殿に奉懸しまつる『御聖像』は斯道の大家修齊畫伯

の謹摸せるもの、淨燈と詩華と芬香とは、滿堂の大衆

村に歸りぬ

附言 此行記すべき事甚だ多けれど他日餘録として洗筆報道する所あるべし

第二回本化夏期講習會彙報 第二信

寄 登 生

峩々たる幽嶺連巒の起伏する所、巍々たる天城險岳の

聳屹する所、琴々たる松嶺大鼓自然の妙樂を奏づる所

瀾々たる金波翠浪の間に開陽白禽の浮沈する所、澄澗

たる魚介磯濱の間に躍る所、透明碧音の温泉地を穿つ

に從て噴出する所、此の天然、此の風光に豊富なる境

にありて、我が夏期講習の講筵を開き、積崗俗塵の下

界を離れて、天上無限の妙靈の地に無限の大氣を涵養

せむとは、他界に此の報を讀むもの豈に羨望たりざる

なき乎、

昨年我か講習會は、吾人か其胎内にあるより深く印

象せられつゝある靈地就中大法難の聖跡に開きぬ、其

の得益の大なる事は、既に讀者の記する所たり、而し

て本年は、弘長元年五月十二の朝に、畏くも我等末世

の衆生の爲めに、彼の賤むべき繩目の蔑辱を蒙むらせ

玉ひて、此の恐るべき怨嫉の爲めに流罪監獄あらせら

れ玉ふ初めての御難跡地にありて、白蛇黒龍の狂奔せ

等の諸講示は限なく聽られたり、

午后一時梵鐘は薄頭に響きぬ、御用旅館大坂屋に定泊

せる講師各位及會員又各旅館に撤宿せる會員は一同整

列して、儀容堂々風采温健、法衣あり、羽織袴あり、

又新式洋服高襟あり、貴婦人あり、小女あり、頗る滿

堂は彩光爛々たりき、傍聽席には、豫て撤文を飛ばし

て地方の有識具徳の士輩には、隨喜參聽すべき旨告知

せるが爲めか、參々伍々雲來せる善男善女つとひ連な

りて席を滿しぬ、第二號音の響と共に幹事柴田頌秀開

會を宣告するに先ちて、總起立を命し、御聖像に向ひ

て最敬禮の虔信を捧げぬ、而して左の順序に依りて舉

行せられぬ、

開會之序

柴田頌秀 小倉豊三郎君 藤原日蓮僧正(代讀) 伊東智盛君 鹽出孝震君 水村道祥大橋惠聲兩君(代讀) 清水龍山講師

祝文朗讀 祝文朗讀及演說 祝文朗讀 祝文朗讀 祝文朗讀 祝文朗讀

祝文朗讀 祝文朗讀 祝文朗讀 祝文朗讀 祝文朗讀 祝文朗讀

祝文朗讀 祝文朗讀 祝文朗讀 祝文朗讀 祝文朗讀 祝文朗讀

(完)

の辯説、特に報すべきは清水講師の登壇に先ちて切齒痛憤して曰く、肝嗟方今何ぞ夫れ我が宗門の振起せざる如斯や、多数の僧侶皆な其の高等の地位に誇占するも、誰も、而かも果して一人の其の自己に顧みて恥ぢざるものなきか、聖祖上人の尊前に跪きて其の末裔として日鏡を自から稱するもの内にやましき所なきか、吾人の如き淺學薄識の青二才が斯る道場に立ちて、聖書を講演せざる可らずとするは、是れ其の人物の拂底を表揚するか、將た又た、聖祖の門下たるの精神を忘却冷視せるの然らしむるにあらざるか、肝嗟今にして宗運の不振を既倒に覺醒せんば、教法は永く地に墜らん哉と熱血點々泣然として數行、滿室皆嘘唏、泣きつ泣かせつ、情極まり、感迫まり、嗚咽せざるなし……此の悲憤、此の慷慨、果して將來の我が本化門下に向て如何の運命を惹起するか『南風不競』の痛奮は全く不競に終りしか、吾人は宗家萬歳の謳歌よりも、可喜哉本日出席の會員の姓名は、梅田敬山(駿河)中込湛隆(甲斐)和泉鑄介(東京)大橋惠榮(駿河)水村遵祥(伊豆)齊藤海實(伊豆)須笠貫量(伊豆)水嶋儀助(越後)神子哲雄(東京)祥雲雄(越後)瀧口義辨(駿河)泉智辨(駿河)伊東智雲(京都)順要英俊(大阪)靈田孝潤(大阪)野村智英(大阪)と、總計の諸家を擧げ立ち簡めたる數は無明を破ふる梵鐘に確然として消散する光景は、真に四土圓滿の靈界とや云はむ

午前八時第一號音にて會員は堂に昇りぬ、清水講師は最も沈着なる態度にて登壇せられ、説き出されたる「台延餘霞」は論條整井、語氣頗る熱誠なり、言語は稍所謂専門的術語多くして、初學者流には容易に其の講述を直解する能はずと雖ども、其の専門宗學の素能を有せる學修の人士に於ては、其の哲學的深遠の學理宗教的幽邃の真理、之を鑽れば漸々堅く、忽然一妙前に在れば乍ら後にある説述、近來稀に聽く所なるなり、其の講述の要綱は即ち「台當の異目」なれども、今や天台は殆ど昔日の壯觀の餘韻を止むるなく、權實小大全く要領を失せり、此れ抑も何ぞや、天台は總て分析的學風を重んじて毫も綜合統一の大原理を説明せず、枝流末泉の細沫は訓話して大道を證得せしめざるは此れ是の大原因なり、其の最も著大なるものは、吾が聖祖上人の至大至明の根本要義を證悟し去られたるによるなりと

午前十時二十分放課せんとする時田中講師より大仁村に着車の飛電あり、直ちに籠の準備を整へ山川氏は先

(京都)飯田助夫(神奈川)山川智應(相模)岸顯妙(武蔵)村上貞三(攝津)村上うの(攝津)岡れい(攝津)小泉要智(武蔵)増田聖道(神奈)舟橋大秀(尾張)田村全詮(東京)溝淵玄靜(伊豆)廣川圓雄(伊豆)山田良雄(伊豆)倉田圓勇(伊豆)山田英源(越後)柴田顯秀(甲斐)花房日秀(京都)増本總太郎(大阪)稻田貞三郎(大阪)橋野嘉平治(京都)本田安三郎(大阪)吉田三郎兵衛(神奈)鷺塚純一郎(東京)阿武野光長(伊豆)小倉豊三郎(阿波)濱野海辨(伊豆)山田一英(東京)等にして其他傍聴者約三十名程の紳士學生士俗の老士女もありぬ、今更「日課表」を得たれば

廿五日	午後一時	開會式
廿六日	前八時講演	後四時道路布教八時大演說會
廿七日	全	後一時茶話會及交名會
廿八日	全	休
廿九日	全	後一時討論會
三十日	全	靈場參拜(祖岩、日蓮崎、蓮) 若寺、彌三郎宅
卅一日	全	休
一日	全	午後一時及八時大演說會
二日	全	紀念宮眞攝影
三日	前十時	開會式 大懇親會

○第二日 講演及道路布教(廿六日晴) 曉風餘りに清々たる青海原より起りて朝に曇かる曉霞

と云ふ記者も被ひて歡迎の爲め「柏嶺」に趣きぬ、田中講師は開會前日より臨會せらるゝ豫定なりしも、近來急劇の天候の爲めに痛く神經に異状を呈せしにも拘はらず躬ら御病軀を力めて此の險難惡道の峠を越へて來會し玉はりしは、吾人の深く本講習會の爲めに謹謝する所なり、午後七時廿分着伊猪戸村料屋御用旅館に入らせらる、先之

午前十時終講せるや伊東智雲氏の發案にて滿場の會員に議りぬ、佛現寺に於ける本會場は、良くも、聖祖上人初度の大法難の靈地にして而も三年間の秋月を配所の草堂に詠じ玉ひ、奮蹟なりしも、峻險にして高丘なれば老幼弱者の登降に窮し、且つ旅館と會場との隔離度に過ぎたれば雨日の困厄は想像の外なれば、幸に此の困厄を救ふに足るは、伊東朝高の奮跡佛光寺なれば希くば會場を之に遷さんと述べられ直ちに之に一決し午後四時道路布教の一隊は新井、秋須美、松原、湯川岡、鎌田等の要所街衢に佇立して、右手に本尊左手に施本數種を携へて宣教せり、最後に警察署前の天理教の堂前に於て大に教陳を張りて、權教邪法の大破折を數番試みぬ、最後伊東氏演說の將に終らむとするや扉を排して銅面白衣の警官は、最前より如何にしてこ

の現象を停解せむと考へ込み 今は一喝の下に道路妨害の罪状の下に處分せんと究竟一と判断せしものと見へ 轟然として一錘を降さむとせし 流石は慣れし伊東氏 窮所を衝き要點を突きて辟易させしと憐笑なれ此危機を見て署長の自宅へ急報するあり 非番の査公を召集するありしも 凱歌は素來我が軍の上にとよめきぬ 之れど本講習會が全伊豆をして警醒せしめたる第一鐘なりき 又美花を咲かしむる第一雨霽なりき午後七時公開大演説會は佛光寺に於て開きぬ遠近の聲黨高標定刻に先ちて早や滿ちぬ

開會之辭 齊藤海實君 柴田頴秀君 増田孝道君 伊東智潤君 寸善尺魔威見 伊東智潤君 何れも近來噴々の法將勇士其の懸河の快辯 金剛輪の如き大議論實に滿堂の聽衆を驚かしむ 就中塩出君の輕快の廣長舌は巧に五百有餘の聽衆をして腹腑所を異にし 愚者も豁然として膝を拍して讚歎しぬ 午後十一時半漸く閉會を告げたり

本日入會者の名は居宿能充(伊豆)張秀則(相模)二見寛二(東京)鈴木解意(相模)木村ナヲ(横浜)木村ン(相模)荒木秀明(東京)釋覺圓(美濃)澤淵玄靜(伊豆)廣川師も隨從せらるゝや 會員の二三の演説あり 山崎也茗茶を配はり 掌大の優頭を饗應せり 而して到着の順に従かひ交名の會に移りぬ 先づ神子哲雄君を始めとし本眞と學歴 境遇と其の宗教心を感起せる經過と 昨年の講習會より本講習會に至りしの觀念の表白等 或は時世に慷慨し 宗教の衰頹に悲憤し 自己の最も悲しき過去に滿堂の情琴を絶たしめ 最も喜ばしき將來に向て絶叫せしむるあり 諸論にして抱腹 眞摯にして始めて其の人格の崇崇を感通せしむるあり 朴訥の一言は流辨數萬言の價值より大なる事等は實に昨年の交名會の比にあらず特に注意すべきは宗教心の涵養愈々深く實在を把住する實證の高まりしは大に現代の思潮を表章するに確かに價值あるものなり 田中清水の二講師も講席ありて此の信仰の表白は將來に向て由々敷大現象を惹起するを保證せりと述べられたり、最後に當地の小學校長齊藤要八氏の信仰の表白に至りては 滿堂泣然として感泣せり 偕も光榮ある交名會なるかな 此れ當に交名に止まらず實に多年各士の抱懐蓋蓋せる大々的思想の大發展を表せるものなり 列席者七十餘名後七時漸く散會せり 午後八時より田中居士は熱心なる幻燈講話を爲して

圓定(伊豆)山田良雄(伊豆)倉田圓勇(伊豆)齊藤要八(伊豆) 福西四郎左衛門(伊豆)山田藤三郎(伊豆)里見敏吉(伊豆)飯田豊吉(伊豆)三澤百五郎 伊豆 佐野信太郎 甲斐)上野吉次郎(甲斐)川口乘道(伊豆)佐野日寛(甲斐) 疊岡光(伊豆)等は正會員にして他に傍聽者には小學校教職員村會議員等の名譽職にあるもの十七人等なり

本日東京神田光臨館より通俗佛教數十冊寄贈せらる  
 第三日 講演 交名及茶話會(廿七日晴)  
 昨日滿會の決議に依り佛光寺に夏期講習の講演場を移す 佛光寺は伊東朝高の舊第宅を献じて一字の本化道場とせし盤跡なり特に現主濱野海無氏は多年の經營に闡衆總堂完善整精建築に裝飾に頗る壯觀を呈せるは世人の稱讚する所なり 本堂の右側に靈物たる楠の下千古の鮮苔莖々の所誰か知らむ 此の大偉人配諒中の監護者とは  
 午前八時開講清水講師二時間田中講師二時間講演せらる 講題は「成佛用心鈔講義」にて精細なる科文三章卅三節に分科せられし本日は其の總論を講述せらる 會員及聽講者等約七十餘名なり 新て十一時に終りぬ 午後一時の餐會と共に會員は一同別館中清水の二講

廳なる空屋に歸せりし人さへも肅然として禮を正し 厥然として時世に慨するものあり 三百有餘の來聽者は後十一時過すでも整然として座を乱すものさへなきは 地方人士の風俗想見すべきなり(以下次號)

●本化宗友會第十回の會合 客月六日小傳馬町祖師室に於て開會、當番は師子王文庫なり、雜誌同盟の方に別は別に議事なし、依て零時五分幹事(山川)は開會を宣言しぬ 次で長瀧智大君前回の經過を報告し、増田君速記臺に上りぬ、着席番號は左の順に定りぬ  
 一 本多日生 二 柴田頴秀 三 加藤文雅  
 四 風間潤靜 五 河原 六 長瀧智大  
 七 山川智應 八 井村尚也 九 岸 顯妙  
 十 飯田完融 十一 松本郡太郎  
 問題は前回より繼續せる「毒量本佛論」なり、一番は其主張せる釋尊本佛論に就て經典祖錄により 懇切に説明せらる、然るに田中居士清水梁山君の出席なかりし爲、討論甚だ熾んならず、唯だ二、七の兩君より交も一番に質議する處ありしのみ、松本君亦種々の質議をなせり、新くて時間に至り閉會、次回の問題は 一毒量本佛論の續き 一淨土論 一本述論  
 會日は八月廿四日 會場は祖師室 當番は日宗社

と定りぬ、今回の欠席者多かりしは是非なければども、次回よりは可成萬障を差操りて一同出席、大に討究論戦あらざばし、宗門統一の聖業遂行成立せんとするの矢先き、本會員の如き登責任を重んぜざるべけんや

●本化中央青年會の成立 蓮祖門下合同の曉鐘一たび錦輝館上に響き渡りてより己來、東西呼應萬口一齊其必要と唱和し、其方法手段の志士の願裏に往來せることなんば嬉しき事ならずや、今京都通信の報する處によれば 見出しの如き會合は日蓮宗京都中檀林生及び各派青年有志者の手によりて、首尾能く其成立を見るに至り、客月五日午後一時鴨東本山頂妙寺に其發會式を擧げたるが、名にしおふ十六本山所屬の編纂よりなれる養成員正會員等無慮二百五十余名の會台あり

●轉て幹事の開會を報するや「オルガン」に和して君ヶ代の唱歌あり、一同起立最敬禮、幹事惣代三谷會善氏の挨拶、發起人惣代島田元泰賛成員惣代桃井了音兩師の祝文朗讀、驥尾日守大僧正の演説、小林日董大僧正の開目抄講話、工藤日諒僧正の談話、段澄依秀居士の演説、幹事岡澤乾珠氏の閉會の辭ありて萬歳を三呼し餘興として御舞等種々の催しありしよし、尙ほ續て十九日に第一回公開演説を顯本法華宗本山山妙壽寺に開

き、(活佛)中村寛澄(吾人の緊要)長尾惠進(日宗の緒素に告ぐ)上嶋圓妙(統一)三谷會善(記慰せよ偉人の聖聲)龜井博龍(高山博士の日蓮論を讀む)野口義禪(富貴)驥尾日守の諸師各得意の辨を振ひ非常の盛會なりしとぞ、因みに該會員は自今道路布教公會演説等あらゆる方法を以て、外は權宗邪教の折伏を試み、内は宗門統一の聖業を遂行せんと意氣軒昂なるよし、さすがは聖日蓮の末弟よ、吾曹は切に望む勇往邁進聖門歸一の大目的を達せられんことを

●法雨充治東播明石の浦 播州明石大藏谷圓常寺主團友石渡日毅師は 豫ては伊豆伊東に關する本化門第二回夏期講習會に是非出席の心組なりしが、岡山教團の請求黙止し難きものあり、爲に自坊に於て顯本法華關西講習會開催の事となり伊東行は可惜中止せられたり、然るに中頃種々の事情曠生の爲め折角の大々の準備水泡に歸せしかども、さりとて遺憾の極みどや思はれけん、咄嗟書を飛ばして姫路大阪京都津山さては攝河泉の志士を糾合し、茲に八月一日より五日開祖書研究會の開設となり、尙ほ「佛敎統一大演説會」の活運動を四、五兩日午後二時より開催せられ、何がさて

なりましたのことは結核なことではありませぬ、わが日蓮聖人の一宗をお立になつたのは法の上よりも國の上より各宗とは大にことなつておる大事な佛敎統一の因縁を以てれるのです

からしてかりうめにも佛敎を口にする人々はこの佛敎統一の大教義を聴ひていたうきたい

どの廣告箋數千枚、白砂青松の明石の浦に兩曼陀羅華と行渡りし事とて、兩日共満堂われん計りの大盛況を呈し 特に該地に於て東京同文館の夏期講習會開會中の事とて、聽衆は中流以上の人士を以て其大半を占め

開會の旨意 石渡日毅

佛敎の大觀 内藤智厚

佛敎の祖師 野老乾爲

日蓮上人とは如何なる人ぞ 清瀬眞雄

聖祖觀 野口義禪

の各題下に二日間の吹大法螺、黒闇をたりし明石の敎界、頗に顯本の曙光はののの其朝霧を破りけるよし

因みに悟窓兄のものせし笑話敎則を左に紹介せん

▲主人日毅客(他宗者)難問的談話耐なりし時、大喝一聲此珍寶且つ佳客に對し「無禮者め」と、客ころくど去る、遂に數日の話柄に上る

▲内藤智厚平日大言壯語を吐く、一日海水に浴し少

し、能仁後れて來り頗る無聊に憫めるもの、如し、汽車の通行ごと大聲手を振り頻りに萬歳を唱ふ、人目して瘋癪と云ふ

▲餘興として善音機を獻ふ、善音機日毅の吟詩を善ふ、衣肝に至るの吟なり、調愈壯、野口立て善音機と共に舞ふ、人狂に近しと評す

▲日毅夏期講習會に就て頻りに管絃を企つ、數日の内室内美を盡せり、然れども其眉間に掲げたる長大の額面を見るに悉く日毅の書なり、人之を難すれば我は是れ備中三教人の一なり、君等知らざるかと氣妬如海

▲日毅の出せる額面文字を批難し、遂に我黨にて書換へ與ふるに議決し、唐紙を展べ五人一字つゝ額字を書き、書し了りて之を見れば春劍秋蛇殆んど字を爲さず、投筆一座哄然

▲同士平生紳士を以て、任じ、規律的法門を演舌す而も其行狀を見れば豈齒らんや、未明に海に行くものあり十時に未だ鼾聲雷の如きものあり、飯を喫せるものあり然らざるものあり、其不規律なる殆んど言語に絶す

●宗徒大會決議實行成同盟會 同會の成立につき伊豆伊東の夏期講習會を幸ひ同地に於て協議會を開く事となり本月一日二日の兩日に涉りて同地の養真館に集合したり實行委員は協議會の召集者なり田中智學、小倉豊三郎の兩氏（脇田堯悌師は檀林新築事務の都合にて二日の午後六時雨を冒して來會せらる）之を代表す召集せられたるものは本化門下の各雜誌社なり而して出席せしは教友社の武田宣明師、立正社（日本之柱）の佐野實孝師、師子王文庫（妙宗）の山川智應氏日宗新報社の社主河原振藏、主筆加藤文雅の兩氏本團代表としては山根顯道出席したり北友社の松森靈運師は教務の都合にて來會するを得ずとて日宗社の加藤師に代理を委託されたり本多團長は緊急宗用の爲め遂に參會せざりき一日は夜分、二日午後一時より開會議のや、決せし時分脇田實行委員參着せられたり而して決議の大意は

一 宗徒大會決議實行期成同盟會は各教團の本山宗會議員役寺（本宗の幹事日宗の録司の如きも）の等の重要な地位にある人を悉く發起員に推舉し其承認を経たる後に於て成立を告白すべし

一 宗徒大會が推選したる決議實行委員及び本會出席者と共に創立委員となり各部の幹事運動に從ひねたる宴會を設け一同歡を盡し第三回の會台を約しで芽出度散解し同會記事の第三信靈蹟參拜の光景、公開演説の概況、閉會式の順序、懇親會の模様等次第に掲載せん

▲おこことわり▼  
 宗用多事の爲め編輯極めて難不悉御諒恕を願ひます伊豆伊東の講習會に本團を代表して出席せし山根青村子「伊豆みやげ」の一節紙面の都合により次第に掲げます向は石川懸雲生「都鄙趣味の比較と宗教」松尾忍水居士の「玄妙阿闍梨日什上人」等趣味豊富なる原稿編輯室に山をなせり次第より之を掲載致します

●僧俗同信會連名表 (のり)

- |                     |                         |                          |                                 |                                 |                           |                           |                  |                  |                   |                   |                         |                         |                         |                         |                          |                          |                        |                        |
|---------------------|-------------------------|--------------------------|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------|---------------------------|------------------|------------------|-------------------|-------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|--------------------------|--------------------------|------------------------|------------------------|
| (愛知縣) 日録 石塚 日録 宮 春治 | (岩手縣) 古川 平吉 工藤 善太郎 宮 春治 | (岩手縣) 安宅 仁太郎 照井 仁太郎 宮 春治 | (岡山縣) 岩原 武四郎 岩原 初造 岩原 住造 岩原 初五郎 | (岡山縣) 岩原 武四郎 岩原 初造 岩原 住造 岩原 初五郎 | (千葉縣) 三須 教英 野上 貞三郎 武藤 榮三郎 | (千葉縣) 三須 教英 野上 貞三郎 武藤 榮三郎 | (石上) 猪野 了察 猪野 貞立 | (石上) 猪野 了察 猪野 貞立 | (廣島縣) 山田 寬祐 大塚 義有 | (廣島縣) 山田 寬祐 大塚 義有 | (栃木縣) 川崎 本照 猪野 了察 猪野 貞立 | (栃木縣) 川崎 本照 猪野 了察 猪野 貞立 | (栃木縣) 小寺 しの 猪野 了察 猪野 貞立 | (栃木縣) 小寺 しの 猪野 了察 猪野 貞立 | (栃木縣) 小川 榮三郎 猪野 了察 猪野 貞立 | (栃木縣) 小川 榮三郎 猪野 了察 猪野 貞立 | (渡邊) 金高 常吉 猪野 了察 猪野 貞立 | (渡邊) 金高 常吉 猪野 了察 猪野 貞立 |
|---------------------|-------------------------|--------------------------|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------|---------------------------|------------------|------------------|-------------------|-------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|--------------------------|--------------------------|------------------------|------------------------|

各雜誌社は賛成者の名義を以て同一歩調の下に之を翼賛すべし

一 發起人の推舉状には創立委員及賛成者一同連署にて之を進呈し三週日以内（於三七日中の経又依るの意味なりと云ふ）に其承認を請ふべし

一 事務所を東京に置き小倉豊三郎氏中川親秀師常誌にて會務を處理する事

一 教友、日本之柱、北友、妙宗、日宗、統一團報の六社は賛成と表したる旨を各紙上に宣言する事とし宣言起草は教友主筆武田宣明師に委託す

其他期成同盟會に對する反對意見の論文掲否の件に就き種々の打合を爲し付屬約束として別項に掲げたる如き購讀料滞納者處分法等を決議して無事閉會す

●第二回本化夏期講習會の終了 聖祖法華經色續の靈地たる伊豆伊東に開かれたる同會は田中講師の「成佛用心抄講話」清水講師の「延台餘霞」は旬日の熱心懇切な講話に會員をして法味に飽かしめ本月二日には武田宣明師の「聖祖の世界觀及人生觀」翌三日には脇田信正の「土宰御書講話」など有益の法談あり三日に閉會式嚴かに修せられ寫眞攝影の後旅館大阪屋（會員旬日の寄居所にて主人の親切職員の行届けるは一月の大

謹啓 小生義錦地帯在中は此上も無き御交誼に預り向過般出發之際は優渥なる送別會并に御見送り等被成下難有存候御親切之段永く感銘可仕候何卒此上とも御親交の程願上候先は以本紙御禮迄如斯に御座候

明治三十五年八月一日

在 東京 松尾英四郎

岡山市顯本法華宗信徒御中  
 佛敎篤信會御中  
 倫理研究會有志御中

廣告

生徒募集廣告

來九月十一日新學年始業候條入學志願者は九月十日迄に入學願書へ履歷書を添へ願出すべし

顯本法華宗大學林

### ▲緊急廣告▼

本會發行『祖書綱要』今日に至り多數の申込有  
 の候ため製本部數確定致し兼るのと八月中は多く  
 の購讀學生諸君が暑中休暇にて不在なるを以て  
 送本期日延期する様との某先輩の注意も有之候間  
 送本期日及び申込期日を如左變更仕候條折角の事  
 故期日間に更に大に御申込を乞ふ

申込期日 八月三十日迄延  
 送本期日 九月三十日迄延拾  
 申込場所 熊本縣飽託郡  
 花園村東光院内

### 綱要學會出版部

主筆田中智學居士

### 妙宗

發行所 相模鎌倉 要山  
 師子王文庫

### 主筆松森靈運 北友雜誌

定價 一冊金六錢  
 半年 六部金卅錢  
 一年 十二部金六十錢  
 爲替は函館惠比須町局振  
 込郵券代用一割増  
 發行所 函館市相生町  
 北友雜誌社

### 日本之柱

主筆佐野貫孝  
 發行所 大坂市東區西高津 中寺町五一六番  
 立正社

主筆武田宣明

### 教友雜誌

發行所 甲府市 稻門村  
 教友社

### 六社同盟購讀料滯納者 處分法

雜誌購讀料を滯納し遂に其支拂の義務を  
 果さざるものは各社互に其姓名及事由を  
 通告し其甚しきものは之を同盟各紙上に  
 揭示することあるべし  
 明治三十五年八月二日 伊豆國伊東に於て  
 之を決議す

教友雜誌 日本之柱  
 日宗新報 北友雜誌  
 妙宗 統一團報

主筆加藤文雅

### 日宗新報

發行所 東京府原郡品川町元南品川四百十二番地  
 統一團報部

### 稟告

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす  
 一本誌は一冊五錢十二冊前金五十七錢廿四冊前  
 金一圓八錢郵券代用は一割増但五厘切手に限  
 一購讀申込の節は住所姓名を階書にて認むべし  
 一爲替は武藏國品川郵便局へ向け御振り込の事  
 一本誌は別に領收書を發せず但し領收證を要す  
 る向は返信料を封入するか或は爲替振込の節  
 拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし  
 一廣告料は五號活字廿四字詰每一行金七錢なり  
 明治卅五年八月十五日印刷發行

發行所 井村 尚也  
 編輯人 山根 顯道  
 印刷人 鈴木 障學

### 發行所 統一團報部

# 統一團報

目次

- 一 本誌大改革豫告……………本多 日生
- 一 護法論……………
- 一 一部部總隊の比較と宗教……………影山 謙二
- 一 伊豆伊豆專門及期講習會日記……………張 大吾
- 一 末法時機相應王修親三對有縁の大導師……………
- 一 ……南山 道人
- 一 統計學上自殺論じて念佛一門に告ぐ……………
- 一 ……窪田 真二

## 統一彙報

- 一 第二回本化門下夏 講習會彙報……………奇 峰 生
- 一 岡山通信……………中川 事顯
- 一 岡山第二報……………全
- 一 第十九教區通信……………横 山 生
- 一 千葉縣連教日誌……………岡 行 員
- 一 圓本法華宗主師者の交送……………

## 廣告數件

第八十九號

行發日五十月九年五十三治明

